

履物の副葬とその象徴性

—エジプト・アコリス遺跡南区の庶民墓の事例から—

花坂 哲*

Footwear as Burial Goods and their Symbolism in Ancient Egypt:
A Case Study from the Burials of the Common People in the South Area of Akoris, Middle Egypt

Tetsu HANASAKA

古代エジプトにおいて、履物は常用品の一つとして一般的な副葬品であり、歩行の際に着用するという機能を反映し、足元に副葬されることが多かった。また、いくつかの儀礼的な象徴性を含んでおり、仇敵を踏み付ける「サンダルの下に」という慣用句から、土地の支配や敵の平定を示し、あるいは「白いサンダル」という用語は清浄性や無垢を表していた。これらの象徴性から転じて、魔除けの護符的な機能も帯びていたと考えられる。アコリス遺跡南区では第3中間期の庶民墓から履物が出土しており、頭部の下や肩口など、頭部周辺に置かれていることが特徴的である。この場合の履物は枕の代用品であったと考えられ、枕が持つ再生復活の象徴性が加わったことが推測される。

キーワード：古代エジプト、第3中間期、サンダル、庶民、埋葬習慣

Footwear, sandals and boots (shoes), were common burial goods in ancient Egypt that assist the deceased to magically walk in the afterlife. Reflecting their function, footwear was usually placed around the feet of the deceased or on top of the coffin. However, footwear also reflects ritual symbolism or metaphor: a symbol of the land ruled or conquered by the Pharaohs or a symbol of ritual purity, innocence, or cleanliness. Moreover, it is assumed that the footwear acts as an amulet or protective charm against evil. In Akoris, footwear in the form of burial goods were found in the tombs of common people in the Third Intermediate Period. The most significant characteristic of their presence was their positioning, placed under or around the head of the deceased. It is highly possible that the footwear represents a substitute for the headrest, which play not only the role of an amulet, but also a symbol of the rising and setting of the sun. This suggests that the footwear from Akoris were buried with a prayer for ritual purity, represented an amulet against an evil and reflected a hope for eternal life.

Key-words: Ancient Egypt, Third Intermediate Period, Sandals, Common people, Burial practices

1. はじめに

古代エジプト史研究の黎明期から現在に至るまで、古代エジプト人の来世観や死生観の究明は常に衆目を集める対象であった。死者とともに墓に納められた絢爛豪華な副葬品や、墓や神殿に残された鮮明な図像、あるいはパピルスやレリーフに記された多彩な内容の銘文など、さまざまな史資料の研究が行われ、古代エジプト人が来世での再生復活を強く願っていたことが明らかとなった。しかし、これらの多くの情報を提供した墓の被葬者は、王や王族、高官といった上位の社会階層の人びと（エリート層）であった。つまり、人口比率では少数の人びとの墓の調査から導かれた来世観や、あるいは生活様式などが「古代エジプト人」の

ものとして一般化されてきたのである。このような定説は見直されつつあるとはいえ、それでもなお、農業を生業とする大多数を占める民衆が暮らしていた集落址や墓地の調査数は多いとは言えない。加えて、彼らの墓は概して簡素であり、副葬品も少ないため、彼らがどのような来世観を抱いていたのかを読み取ることは難しい。

こうしたなかで、エジプト中部のナイル河東岸に位置するアコリス (Akoris) 遺跡の南区では前12～前7世紀頃の集落址が検出された (PR AKORIS 2002以降)¹⁾。古代エジプトの時代区分では新王国時代から末期王朝時代にかけての時期にあたり、集落活動が最も活発であったのは新王国時代末から第3中間期に

かけてのことと考えられる。南区の集落に暮らした人びとは簡素な住居に暮らしながら農業や漁業を生業とし、時には手工品製作を行い、さらには遠方との交易・交流を行っていた庶民層であった。

彼らの信仰に目を向けると、アコリスの都市神はワニの頭をもつソベク神であったが²⁾、南区で出土する護符に表された神々はパタイコスやベスなどの下級の神々が目立つ。セクメトやイシス、ハトホルなど国家的な信仰を集めた女神の護符も多く、ファイアンス製セクメト女神像用の土製鋳型も出土している。一方で、神々の姿を同定できない粗雑な護符も珍しくなく、木棺に描かれた神々の図像も稚拙である。また、護符や木棺に記された銘文は、意味を為さない記号化した文字列であることが多い。加えて、豊饒祈願や悪夢除けの機能を持っていたと推定されるコブラ形土製品や (Szpakowska 2003, 2011; 花坂 2011; Hanasaka 2012)、他に類例がない、頭部を意図的に破壊した民間信仰の存在を想起させる土製ヒト形小像も存在する (花坂 2009; Hanasaka 2014)³⁾。これらのことから、南区に暮らした人びとの信仰は、国家的な信仰や神学体系から完全に隔絶されてはいないものの、その知識は乏しく、家庭の安全や子供の健康的な生育、穀物の豊穡など、現世利益的な願いを第一義とするものであったと言える。

活発であった庶民の集落活動も第3中間期中頃になると停滞してくる。南区は寒村となり、放棄された住居の壁沿いや穀物倉庫のなかに墓が造られ、一帯が墓域としても利用されるようになった。それらの墓は装飾のない簡素な土坑墓であり、副葬品を伴った例は多くない。しかし、主要な副葬品として、同時期の他遺跡には類例の少ない皮革製のサンダルやブーツ (クツ) が含まれる点に特徴がある。さらに、それらの履物の出土位置が頭部付近に集中していることが特筆される。そこで本稿では、副葬品としての履物の象徴性と、アコリス遺跡南区の埋葬形態から導かれる、庶民が抱いていた死生観・来世観の一端を明らかにすることを目的とする。

2. アコリス遺跡南区の庶民の埋葬形態

アコリス遺跡南区でこれまでに検出された墓のうち、被葬者の年齢と性別の双方が不明なものを除くと82基が挙げられる⁴⁾。墓室にヴォールト天井を架けた墓や、日乾レンガの外郭を備えた墓も検出されたが、外部構造を備えた例はごくわずかである。ほとんどの墓は浅く掘った墓坑に「棺」を直接安置しただけの簡素な土坑墓である。また、複数体分の人骨が散乱していた土坑もあるが、被葬者が一人だけの単葬墓を基本とする。

被葬者の年齢と性別に注目すると (表1)、20歳以上の成人被葬者が82例中27例 (32.9%)、10代が6例 (7.3%) であるのに対し、10歳以下の子供は49例 (59.8%) を数え、全体の6割を子供の墓が占めている。なかでも、新生児や3歳未満の乳幼児の墓は32基を数える。乳幼児の墓は南斜面に集中する傾向にあり、「集落内埋葬」が行われていた可能性が指摘されている (Tsuji-mura 2014; 和田 2018)。古代エジプトにおいて、乳幼児や子供を対象とする「集落内埋葬」は珍しいものではなく、エレファンティネ (Elephantine)、ラフーン (Lahun)、テル・エル＝アマルナ (Tell el-Amarna)、デイル・エル＝メディーナ (Deir el-Medina) など、これまでに本格的な調査が行われてきた古代エジプトの都市・集落遺

表1 被葬者の年齢・性別

	男性	女性	不明	小計 n=82 (%)	副葬品あり 年齢・世代別
new born	0	0	8	8 9.8%	0
0-2 (infant)	0	0	24	24 29.3%	1
3-6	1	1	8	10 12.2%	3
7-10	1	1	5	7 8.5%	5
11-15	2	2	0	4 4.9%	2
16-20	1	1	0	2 2.4%	1
20s	1	5	0	6 7.3%	1
over 30	2	6	0	8 9.8%	2
adult	6	4	3	13 15.9%	0
小計 n=82 (%)	14 17.1%	20 24.4%	48 58.5%	総計 82	小計15 (18.3%)
副葬品あり 性差による別	4	5	6	小計15	

表2 棺の種類

	土器棺	植物 マット	植物 籠	水際 植物	その他	箱形 木棺	人形 木棺	不明
new born	8	-	-	-	-	-	-	-
0-2 (infant)	4	6	2	3	1	5	1	2
3-6	-	-	-	2	-	5	1	2
7-10	-	-	-	-	1	5	1	-
11-15	-	-	-	-	-	-	4	-
16-20	-	-	-	-	-	1	1	-
20s	-	-	-	-	-	-	6	-
over 30	-	-	-	1	-	-	6	1
adult	-	-	-	-	-	1	9	3
小計 n=82 (%)	12 14.6%	6 7.3%	2 2.4%	6 7.3%	2 2.4%	17 20.7%	29 35.4%	8 9.8%
副葬品あり 棺種別	1	0	0	1	1	5	7	0

表3 被葬者の頭位と棺種

	人形 木棺	箱形 木棺	その他 棺種不明含む	total	n=61
西	14	6	8	28	45.9%
東	3	4	4	11	18.0%
東西軸方向	1	0	3	4	6.6%
南	2	1	4	7	11.5%
北	4	2	4	10	16.4%
南北軸方向	0	0	1	1	1.6%
参考：頭位不明	(6)	(3)	(12)	計61 (小計21)	

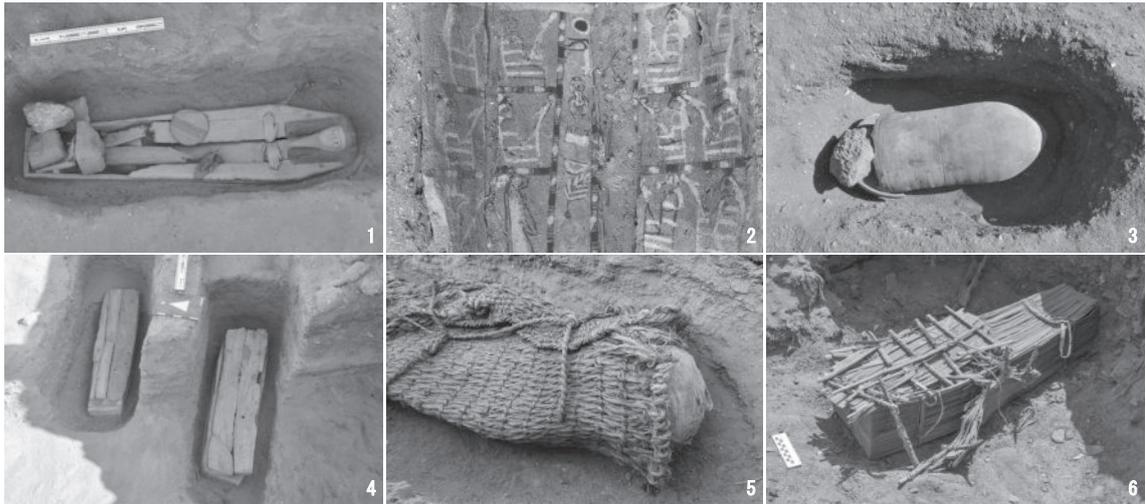


図1 多様な庶民の「棺」

1. 人形木棺 (2018-2号墓) 2. 木棺に描かれた神々 (2004-1号墓) 3. 土器棺 (2018-5号墓) 4. 箱形木棺 (2017-3, 4号墓) 5. マット包み (2018-1号墓) 6. ヨシノハルファを使った「棺」 (2016-6A号墓)

跡では、いずれでも確認されている (和田 2018)。

ところで、アコリス遺跡では岩山の四方を取り囲むように、さまざまな時代の墓が造営された。南区の墓域と同時代の別の墓域として、岩山西側 (西区) の岩窟シャフト墓群が挙げられる。西区の墓群は古王国時代に起源を持つが、ほとんどの墓が古代に盗掘を受けており、精確な年代を決めることは難しい。しかし、シャフト壁面に残る工具痕や出土遺物から、多くの墓が第3中間期から末期王朝時代に再利用されたと考えられる。検出された計34体分の人骨は、成人男性が15体、成人女性が12体、子供が7体であり、新生児は含まれない (Tsuji-mura 2014)。すべてが第3中間期のものではないが、南区と西区の被葬者の年齢層に明確な差異が認められることから、南区が子供用、西区が大人用の墓域であった可能性がある。

南区の墓域に論を戻すと、そこで使用された棺は、その種類が不明な墓を除く74例中、人形木棺が29例 (39.2%)、箱形木棺が17例 (23.0%) を数える (表2)。特に10代以降の被葬者に限ると、そのほとんどが人形木棺に納められている。新王国時代第20王朝から第3中間期第21王朝にかけて、テーベ (Thebes) のエリート層の間では被葬者のために壮麗な墓室を造ることを止め、前代までの墓を再利用した集団埋葬へと変化したことが知られている。これに伴い、個人を区別する唯一の副葬品となった人形木棺の重要性が高まったことが指摘されている (Cooney 2011)。ただし、アコリス遺跡南区における人形木棺の使用率の高さが、このようなテーベ地域の埋葬形態の変化の影響を受けたものであるかは定かではない。

新王国時代のラメセス朝から第3中間期にかけての人形木棺は「イエロー・コフィン」と呼ばれ、下地が

黄色く塗られ、ニスの上塗りされている点の特徴の一つである (Niwinski 1988; Taylor 1989, 2003; Aston 2009 など)。新王国時代の文字史料によると、装飾内容によって価格は大きく異なっていたようだが、副葬品として一般的であったシャブティ像やカノポス壺、護符、サンダルなどと比べると、人形木棺は非常に高価な葬送用品であった (Janssen 1975; Cooney 2011)。アコリスのような地方の中小集落の一般庶民が所有する葬送用品として、費用の嵩む人形木棺はふさわしくないように思われる。しかし、南区で出土した人形木棺のなかには「イエロー・コフィン」の特徴を有した例があるものの (Uchida 2016)、薄い黄色の下地の上にニスが塗られておらず、テーベ地域のものとは比較にならないほど簡素な造作である。装飾はおしなべて乏しく、髪の毛や眼などの一部だけが黒色で彩色された人形木棺 (単彩色) や (図1-1)、なかには下地さえ塗られていない無垢材のままの木棺もある。水色や赤色などの顔料を使って装飾した木棺もあるが (多彩色)、その神々の描写は稚拙であり、記された文字列も文法的に意味を為さない (図1-2)。これは南区に暮らした人びとの識字率の低さを物語っており、同時に木棺を製作した工人も伝統的な神々の姿や文法体系に精通していなかったことを示している。このように、アコリス遺跡南区で出土する人形木棺は、装飾や仕上げを省略した庶民用の安価な製品であったと考えられる。

一方で、10歳以下の被葬者の埋葬形態を見ると (表2)、3歳未満の新生児や乳幼児は土器棺に (図1-3)、3歳から10歳までの子供は箱形木棺に納められている比率が高い (図1-4)。子供の「棺」は多様性に富んでおり、植物を編んだマットや把手付きの植

物製の籠 (図 1-5)、ヨシ (reed)⁵⁾ やギョリュウ属樹木 (*Tamarix*) の枝などで遺体を「簀巻き」にした埋葬例がある。また、類例があまりない「棺」として、ヨシまたはハルファ (*Desmostachya bipinnata* または *Imperata cylindrica*) のような植物を折り曲げて方形とし、それらを水平方向に積み重ねて箱状にした蓋付きのものがある (図 1-6)。このように、身近にあるさまざまな植物を「棺」として利用している点は、南区に暮らした庶民の埋葬形態の特徴の一つと言える。

また、被葬者の頭位方向は、新王国時代になると前代までの北向きから西向きへと変化し、非エリート層の土坑墓では北と西に二分され、さらに南向きと東向きも相当数が存在するという (Raven 2005; Kemp 2007; 和田 2008)。第 3 中間期のアコリス遺跡南区においても、西向きの頭位が半数近くを占めるものの、残りはすべての方位に大差なく見られる (表 3)。続く末期王朝時代からプトレマイオス朝にかけてのサッカラ (Saqqara) における単純埋葬 (土坑墓) では、7 割以上が西を向くと言う (米山 2019)。したがって、アコリス遺跡南区の墓域は、西向きの頭位が庶民の間でも標準化する移行期にあったことが窺える。あるいは、庶民層は頭位方向に深い注意を払っていなかった可能性もある。

南区で副葬品を伴う墓は 82 基中 15 基 (18.3%) である (表 1)。被葬者の年齢別に見ると、7 歳から 10 歳の子供が 5 例とやや多いが、残りは乳幼児から 30 代まで 1~3 例ずつ満遍なく分布している。また、男性が 4 例、女性が 5 例、不明が 6 例と性差にも偏りはない。副葬品を伴った墓の「棺」の種類を見ても、人形木棺が 7 例、箱形木棺が 5 例、土器棺、水際の植物 (ヨシ属の簀巻き)、その他 (ギョリュウ枝の簀巻き) が 1 例ずつである (表 2)。つまり、副葬品の所有の有無と、墓の諸要素との間には、明確な関連性や特徴を見出すことはできない。一方で、副葬品の種類ははっきりとした傾向を指摘できる。すなわち、15 基中 10 基の墓で履物が見つかったことであり、そのうち 6 基では履物だけが副葬されていた。ただし、同時代の西区の墓域では、副葬品を伴う墓はほとんどなく、履物も見つかっていないため、第 3 中間期のアコリス全体における副葬品の特徴とは言えず、南区の墓域に限定される特徴となる。

3. 履物を伴う埋葬

3-1. 通時的概要

古代エジプトの履物はサンダルとブーツ (クツ) に大別される⁶⁾。サンダルはいわゆるビーチサンダルや草履のように、足の親指と人差し指の間に前緒を挟

み、Y 字または T 字のストラップ (横緒) で足甲を押さえる構造である。皮革製サンダルの場合には、加えて踵ストラップが付属する。王朝時代の皮革製サンダルの最大の特徴は、これらのストラップを結び付けるために踵部の側面に切り込みを入れて「耳」を作っている点にある。こうした「耳付きサンダル」は王朝時代を通じて変わることがなかった。一方、ブーツは新王国時代になって登場し、足全体を覆うアッパー (甲革) を「ステッチダウン製法」でソールに縫い合わせたシンプルな作りであった⁷⁾。古代エジプトのアッパーを備えた履物のほとんどが、踝丈の高さのアンクルブーツやショートブーツと呼べる形状をしている。ソールとアッパーだけからなる現代の靴の製法に近似したブーツ (現代型ブーツ) のほかにも、耳や前緒などの王朝時代のサンダルの要素を残した中間形態のブーツもあった (Hanasaka 2017)。また、足の一部だけをアッパーが覆うスリッパや、「Open shoes (OP クツ)」と呼ばれる特殊な種類も知られている⁸⁾。

素材は皮革製、植物製、木製、金属製がある。サンダルはすべての素材で作られたが、ブーツは皮革製のみ、OP クツは皮革製と植物製が知られている (Veldmeijer 2009b, 2009c)。アコリス遺跡では皮革製のサンダルとブーツ、および植物製のサンダルと OP クツが出土している (花坂 2005; Hanasaka 2010 など)⁹⁾。

古代エジプトにおける履物の副葬の起源は定かではない。イタリアのトリノ美術館に所蔵されている、先王朝時代ナカダ I (Naqada I) 期のジェベレイン (Gebelein) 遺跡出土とされるサンダルは、墓から出土した蓋然性が高い¹⁰⁾。確実な例としては、初期王朝時代第 1 王朝のサッカラ遺跡 3504 号墓から 3 組の皮革製サンダルが見つかった (Emery 1954: 18)¹¹⁾。それらの大きさは 25 cm ほどを測り、着装するのに十分な大きさではあるが、ソールが 1 層の薄いものであるため、実用には適していない。なお、王朝時代のサンダルの特徴である耳はまだ見られない。古王国時代の貴族墓のレリーフには耳付きのサンダルを履いた人物がしばしば描かれているが、当該期の履物の副葬例はほとんど知られていない。中王国時代に並行するパン・グレーブ (Pan-Grave) 文化期の遺跡やケルマ (Kerma) 遺跡などのヌビア系からの出土例を除くと、次に皮革製のサンダルまたはブーツの副葬例が多く報告されるようになるのは新王国時代のことである。

第 1 中間期から中王国時代にかけては、皮革製に代わり、木製の模造サンダルの副葬が流行していた (図 4-2)。木の板をサンダルのソール形に切り出した木製模造サンダルは、長さ (高さ) 5 cm ほどの木片を挿し込んで前緒および耳を模し、その先端に帯状の布や

皮革を挟んでストラップを象っている。耳や踵ストラップを表現していることから、皮革製サンダルを模したものと考えられる。木製模造サンダルは、成人男性の平均的な足のサイズに近い 25 cm ほどの長さを測るものが多いが、実際に装着して歩行するには適しておらず、副葬用に特別に準備されたものであった。木製模造サンダルの出土例が再び増加するプトレマイオス朝期のもは緑色や黄色の多彩色で塗色された例が多いが、第 1 中間期から中王国時代の木製模造サンダルは、ソールの全面あるいは周縁部が白く塗色されていることが最大の特徴となっている。

木製模造サンダルは比較的類例が多く、中王国時代の未盗掘墓に限っても、7 遺跡 13 件の埋葬 (12 基の墓) からの出土例が知られている (Podvin 2000)。サンダルの出土位置は、棺蓋の上、棺の内側、被葬者の足元の 3 つに大別することができる (Hayes 1990a; Podvin 2000)。棺蓋の上にある場合でも、多くは棺の末端から見つかるため、木製模造サンダルは被葬者の足元やそれに対応する位置に置かれることが通例であったと考えられる。また、中王国時代の箱形木棺は「コフィン・テキスト」などの銘文とともに、容器、枕や鏡などの常用品、装身具など、葬送儀礼で必要とされる器物を描いた「オブジェクト・フリーズ」と呼ばれる装飾帯で飾られていることがある (Jéquier 1921; Willems 1988; 山崎 2014)¹²⁾。そこに描かれた器物も実際の機能を反映しており、枕や鏡は頭部側に、サンダルは足元側に描かれていることが多い。

新王国時代になると木製模造サンダルは姿を消し、再び皮革製のサンダルとブーツが副葬され、植物製サンダルも数多く納められた。トゥタンクアモン (Tutankhamun) 王墓からは皮革製、植物製、金製のサンダル、あるいは皮革を素地として、ソールに木片を挟み、ビーズや金で装飾した混交素材の OP クツなど 80 点以上が出土している (Veldmeijer 2010a)¹³⁾。また、トゥタンクアモンの曾祖父母にあたるユヤとトゥヤ (Yuya and Tuyu) の墓からも、植物製を中心とした 20 点ほどのサンダルが見つかった。これほど多数の履物が出土するのは王族の墓に限られるが、ルクソール西岸の多くのエリート層の墓にも 1~4 点の皮革製履物が副葬されていた。高価な木棺を準備できず、前代のものを再利用せざるを得ない経済状況であっても、化粧用具、杖、サンダルや衣服、食糧貯蔵容器などの私的な常用品は準備することができたとされる (Smith 1992)。現在、博物館や美術館に収蔵されている皮革製のサンダルやブーツのなかには来歴が不明瞭なものも多いが、その形状や製作技法、赤色や緑色に彩色した皮革を用いた装飾などから、それらの多くは新王国時代から第 3 中間期に属す

る、墓の副葬品であったと考えられる。

新王国時代における履物の出土位置に関する情報は少ない。ルクソール西岸にある、ハトシェプスト (Hatshepsut) 女王治世の大家令であったセネムト (Senenmut) の墓の下層から、セネムトの息子あるいは弟と目されているアメンホテプ (Amenhotep) の墓が見つかる。若くして死亡した被葬者の足元には、長さ 19.8 cm の赤色皮革製のサンダルが置かれていたという (Hayes 1990b: 188)¹⁴⁾。一方、テーベ西岸のアニ (Ani) の墓では、木製ベッドや枕などの常用品が副葬されており、さまざまな化粧用具とともに赤色皮革製サンダルが化粧箱のなかに入れていた¹⁵⁾。数多くの常用品が副葬される場合には、必ずしも被葬者の足元には置かれず、他の常用品とともに副葬されることもあったことが推測される。

また、皮革製と植物製のほかに、新王国時代から第 3 中間期にかけて金属製の模造サンダルの副葬が流行した。金製の指サックとともに、トゥタンクアモン王のミイラの足に装着された状態で発見された金製のサンダルが著名であるが (Veldmeijer 2010a: fig. 1. 8)、このほかにも第 18 王朝のトゥトモセ 3 世 (Thutmose III) の外国出身の 3 人の妻 (王妃) の墓や (Winlock 1948; Lilyquist 2003)、タニス (Tanis) 遺跡の第 21 王朝のプスセネス 1 世 (Psusennes I) や第 22 王朝のシェションク 2 世 (Sheshonq II) の王墓からも金製のサンダルが出土している。また、王家の谷の 56 号墓で出土した銀製のサンダルもある (Davis 1908: 44)¹⁶⁾。所有者が王や王族に限られることから見ても、これらの金属製のサンダルは特別に準備された葬送用品であったと考えられる。むしろ、実際に装着して歩行するものではなく、模造品であった。

第 3 中間期に年代付けられるアコリス遺跡南区の墓域では、副葬品が出土した 15 基の墓のうち 10 基に履物が含まれていた。これを見る限り、第 3 中間期に入っても依然として履物の副葬は一般的なことであり、むしろ他の製品よりも重視されていた印象さえ受ける。ところが、報告書等が刊行されている 50 遺跡 (地域) ほどの 1000 件以上の埋葬を対象とした、第 3 中間期の埋葬形態や副葬品の組成を網羅的にまとめた研究によれば、上記の金属製模造サンダルを除くと、履物が副葬されていた埋葬はわずか 4 遺跡 13 件に留まる (Aston 2009)¹⁷⁾。この 4 遺跡のうち、履物の出土位置が言及されているのはマトマール (Matmar) 遺跡だけである。マトマール遺跡では、第 3 中間期の非エリート層の埋葬が 542 件 (519 基) 検出され、そのうち副葬品として護符を伴うのは 194 件 (35.8%) である。アコリス遺跡南区の例 (18.3%) と比べるとそれほど低い割合とは言えないものの、履物が出土したのはわずか 4 件に過ぎない (Brunton 1948; Aston

2009; Humphreys 2010)。そのうち3件は膝や腿などの脚部周辺から出土しており、残る1件は箱形木棺を囲む日乾レンガの外郭の外側に置かれていた (Brunton 1948: 90)。

3-2. アコリス遺跡南区の事例

アコリス遺跡南区では副葬品を備えた墓が15基確認されているが(表4-1、4-2)、履物以外の副葬品やその墓については別稿で取り上げているため詳述は割愛する(花坂 2020)。概要だけを記すと、副葬品の多

くはガラス製やファイアンス製ビーズを使ったネックレス、ブレスレット、リングなどの装身具、ファイアンス製護符などである。最も数多くの副葬品が出土したNo. 15の墓で見つかった、ミイラの胸の上に置かれたハルファあるいはヨシの外皮で作った円盤状の植物製品は、後述するように、南区では履物を伴う2基 (Nos. 1, 4) でも同一製品の破片が出土している¹⁸⁾。

さて、履物が出土した10基の墓の被葬者は各年齢帯に分布し、性別の偏りもなく、履物を所持する被葬者に明確な特徴があるとは言い難い(表4-1)。強いて

表4-1 履物を伴う埋葬

No.	墓番号	木棺種類 (彩色有無) 木棺サイズ	被葬者			履物の 出土位置	種類	履物			他の 副葬品 有無
			年齢	性別	頭位			左右 (LR)	長さ cm	幅 cm	
1	2017-6	人形木棺 (多彩色) 170 x 42 cm	7~8歳	不明	東	棺内 頭部下 頭部・左肩脇	皮革製ブーツ?片 植物製サンダル片	? ?	max (10.0) (15.0)	max (5.0) (7.0)	○ *1
2	2018-4	人形木棺 (単彩色) 170 x 40 cm	15~16歳	男性	北	棺内 頭部下	皮革製履物片	-	-	-	○ *2
3	2016-4	人形木棺 (未彩色) 189 x 55 cm	30歳前後	女性	西	棺外 木棺下 (頭部下)	赤色皮革製ブーツ 植物製OPケツ	L R LR	22.1 22.3 (29.0)	7.6 8.1 10	○ *3
4	2018-2	人形木棺 (単彩色) 182.5 x 43 cm	12~13歳	女性	西	棺外 蓋上 (腹部付近)	赤色皮革製ブーツ	L R	20.5 20.9	7.6 7.5	○ *4
5	2017-3	箱形木棺 (未彩色) 110 x 33 cm	3~4歳	不明	東	棺内 頭部下	赤色皮革製ブーツ	L R	15.3 15.7	5.8 6.8	×
6	2007-2	箱形木棺 (未彩色) 140 x 29 cm	8~10歳	男性	西	棺内 頭部下	皮革製ブーツ	L R	20 19.5	7.9 8.2	×
7	2016-6B	人形木棺 (単彩色) 169 x 40~29 cm	14~15歳	男性	西	棺内 両肩脇	皮革製ブーツ	L R	24.6 25.1	11.1 11.0	×
8	2010-5	人形木棺 (単彩色?) 188 x 50 cm	成人	女性	西	棺内 右膝下	皮革製サンダル片	?	(12.3)	9.2	×
9	2018-6	枝木「簀巻き」 157 x 34 cm	8~9歳	不明	南	棺外 左肩脇	皮革製ブーツ	L R	22.8 22.2	8.1 7.8	×
10	2016-7	人形木棺 (単彩色?) 180 x 40 cm	20代前半	男性	西	棺外 頭/右肩付近 外郭内	皮革製ブーツ	L R	23.6 (16.7)	7.9 9.0	×

*1 円盤状植物製品 (木棺内頭部側先端) *3 スカラベ (左手首)
*2 ファイアンス製ベス神護符 (頭部付近)、植物種子入り、亜麻布袋×2点 (頭部付近、右腕) *4 銅/青銅製耳飾り、タカラガイ (棺内足元)、円盤状植物製品 (蓋上)

表4-2 他の副葬品のみを伴う埋葬

No.	墓番号	木棺種類 木棺サイズ	被葬者			副葬品の種類 (出土位置)
			年齢	性別	頭位	
11	2018-5	土器棺 56x25 cm	3~6か月	不明	北	タカラガイ (棺内)
12	2015-1	アシ束+マット覆い	3~4歳	不明	南	ファイアンス製ビーズ一連ネックレス (首回り)
13	2004-1	箱形木棺 133x33cm	8~9歳	女性	東	ガラス製ビーズ付き亜麻ヒモ (ネックレス) (首回り)
14	2010-14	箱形木棺 95x28 cm	3~4歳	女性	西	青色ガラスビーズ付き青銅製ピン、ガラス製ビーズ×2点、ファイアンス製ビーズ×1点、ファイアンス製ウジャト眼護符、ファイアンス製カルトウーシュ形リング (以上、亜麻布巻きミイラの胸の上)、ファイアンス製縦琴形護符首飾り (首回り)
15	2015-Sec.7	箱形木棺 116x28 cm	7~9歳	不明 (女性)	南	木製クラッパ×2組 (足元)、ファイアンス製ビーズ一連ネックレス (首回り)、ファイアンス製イシ女神とバステト女神の護符 (首回り)、ファイアンス製一連ビーズブレスレット (左手首)、ファイアンス製ビーズ一連アンクレット (左足首)、円盤状植物製品 (胸の上)

挙げるとすれば、履物を伴う墓の被葬者は南区のなかでは年齢帯がやや高い層と言えるかもしれない。南区では皮革工房址と住居址の双方から数多くのサンダルやブーツが出土している（花坂 2004, 2005; Hanasaka 2010, 2017）¹⁹⁾。そのサイズは大人用と言うべきものであり、乳幼児の足長に適した 12~15 cm 程度の履物は数点しか出土していない²⁰⁾。第 3 中間期には庶民の間でも履物の着用が広まっていたと言えるが、乳幼児は履物を履く習慣はなかったと考えられ、よって彼らの墓に副葬されることもほとんどなかったことが窺われる。

以下で、履物が出土した 10 基の墓について、他の副葬品を伴う墓（表 4-1; Nos. 1~4）と、履物だけが副葬された墓（表 4-1; Nos. 5~10）に分けて、履物の出土位置に注目しながら概要を記す²¹⁾。

No. 1（2017-6 号墓）：棺蓋は土圧で潰れていたが、多彩色の人形木棺に性別不明の 7~8 歳の子供が納められていた。亜麻布で巻かれたミイラの左側頭部から左肩付近にかけて、元来は一つの製品であった植物製サンダルの破片が散乱していた。植物製サンダルの製作技法として一般的と言える、幅 1 cm ほどの帯状の植物ヒモを菱四つ目編みしてソールを作っている²²⁾。また、ミイラの頭部の下から皮革製の履物の破片も出土した。遺存状態が非常に悪いが、縁辺部にアッパーが残っているように見えるため、ブーツであったと推測される。上述した通り、円盤状の植物製品の破片が木棺内の頭部側の先端から見つかった。赤色と黒色（または緑色）に着色した幅 0.2 cm ほどの植物帯が並んでおり、少なくとも赤色は 16 段、黒色は 19 段が残る。

No. 2（2018-4 号墓）：人形木棺の上に植物製マットが掛けられていたが、棺蓋は完全に朽ち果てており、棺身の遺存状態も非常に悪い。15~16 歳の男性のミイラに巻かれていた亜麻布も朽ちており、骨が露出していた。頭部の下から見つかった亜麻布に膠化した皮革断片が付着していた。詳細は不明であるが、一部に残る縫合の痕などから皮革製の履物であったことは確実である。また、頭部付近からはファイアンス製ベス像の護符と亜麻布製の小さな巾着袋が出土した。同様の巾着袋は右前腕部付近からも見つかった。精確な分析は行っていないが、前者の巾着袋にはブラックシード（別名ブラッククミン；*Nigella sativa* L.）と思われる種子が、後者にはクミン（*Cuminum cyminum* L.あるいはキャラウェイ；*Carum carvi* L.）と、少量のコリアンダー（*Coriandrum sativum* L.）が入っていた。3種ともに現在も香辛料として使われる強い香りを発する種子であり（Zohary et al. eds. 2012: 163-165）、ミイラの悪臭を弱め、芳香を高める目的で副えられていたのだろう。

No. 3（2016-4 号墓）：亜麻袋で全体が包まれた 30 歳前後の女性被葬者が、完全に無垢の人形木棺に納められており、木棺の下から赤色彩色皮革製の現代型ブーツと植物製の OP クツが重なるように見つかった（図 2-1）。木棺の下、つまり墓坑基底部から出土した唯一の例であり、その位置は頭部の真下にあたる。ブーツのアッパーとソールには当て革による補修痕が残る（図 2-2）。また、尖った先端が反り返っていたと思われる植物製 OP クツは先端が破損しており、前緒の付け根にも亜麻糸を巻いて補修してある。また、ソールの表側、つまり足裏が接する面には

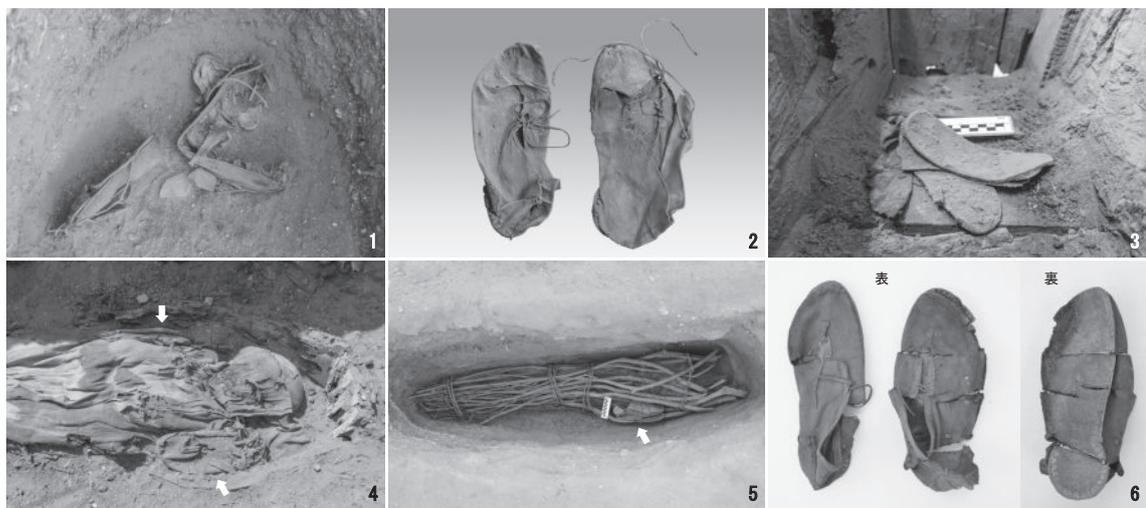


図 2 履物の副葬状況

1. 木棺の下に置かれた履物（2016-4 号墓） 2. 赤色皮革製ブーツ（2016-4 号墓） 3. ミイラ頭部下に置かれた履物（2017-3 号墓） 4. ミイラ肩口に置かれた履物（矢印；2016-6B 号墓） 5. 枝木の上に置かれた履物（矢印；2018-6 号墓） 6. 裁断された皮革製ブーツ（2018-6 号墓）

うっすらと黒い痕が残っている。したがって、両者ともに実際に着装された履物であったと考えられる。

棺蓋の上や棺身の内部、あるいはミイラを包んだ亜麻袋の上から副葬品は見つかっていない。しかし、X線とCTスキャンによる解析の結果、紐に通したスカラベを左手首に巻いていることが明らかとなった。なお、この女性ミイラは脳、心臓、肝臓、肺が摘出されていないことも分かっており、また、踵の骨の摩耗が激しいため、日常的に重いものを運んでいたと推測されている (Tsujiura 2018)²³⁾。

No. 4 (2018-2号墓)：黄色の下地に髪の毛などが黒く塗られた単彩色の人形木棺に、12~13歳の女性被葬者が納められていた。棺蓋の上に赤色皮革製の現代型ブーツと円盤状の植物製品が置かれていた (図1-1)²⁴⁾。ブーツは両足ともにソール接地面側の踵部が当て革によって補修または補強されている。右足用は棺蓋上の中央付近に、左足用は棺蓋の上から滑り落ちて、棺身の下に半分潜り込むように土坑との間に挟まっていた。ただし、木棺の蓋が半分だけ壊され、内部のミイラも動かされた形跡が残ることから、古代に盗掘を受けたと思われる。その際に、棺の上に置かれていたブーツが滑り落ちたか、あるいは、棺内にあったブーツと植物製品がミイラとともに一旦取り出された後、棺蓋の上に戻された可能性がある²⁵⁾。また、棺内のミイラの足元からタカラガイと銅または青銅製の耳飾り (ピアス) が1点ずつ出土した。ミイラの左耳にピアス孔が開いていることから、耳飾りは盗掘の際に耳から外れたものだろう。

この墓から出土した円盤状の植物製品は直径22.1cmを測る完形品である。ハルファあるいはヨシを細く裂いた外皮を使った竹細工のような製作技法や、赤色と黒色 (または緑色) に着色した植物皮を含む点などが、上述した他の2点の破片と共通しており、同一種類の製品であることに疑いはない。素材や真円に近い形状から団扇とも考えられるが、把手 (持ち手) はなく、編み込まれておらず耐久性がないため、団扇のように動かす使用法は適していない。本品よりも一回り大きい類例は、所蔵先で「編み籠の蓋」と紹介されていたり、編み籠とともに展示されているが、出土した遺構や状況は明らかではなく、その用途は定かではない²⁶⁾。胸の付近に置かれていたことなどを勘案すると、アクリス遺跡南区出土の本品は護符のような役割を果たす製品であったと推察される。

No. 5 (2017-3号墓)：箱形木棺に納められていた被葬者は性別不明の3~4歳児であった。その頭部の下から赤色皮革製の現代型ブーツが出土した。左右ともソール接地面が上を向き、踵がわずかに重なるように置かれていた (図2-3)。補修痕はなく、明確な使用痕も見当たらないため、未使用品と思われる。上述

した通り、乳幼児は履物を着用していなかったと考えられるので、本品は葬送用品として特別に準備されたと言える。

No. 6 (2007-2号墓)：南区の北側斜面で検出された墓のなかで、履物が出土した唯一の例である。南斜面の墓群に比べると時代がやや新しい可能性がある。側板の痕跡や底板の形状から箱形木棺であったと分かるが、棺蓋と側板はまったく残っていない。亜麻布が外れ、前頭部の骨の一部が露出した被葬者は8~10歳の男児であり、皮革製ブーツが後頭部から首の下にかけて置かれていた (図4-3)。前緒と耳が残る、サンダルとの中間形態と呼べるこのブーツは、爪先の向きを揃えて横並びに置かれていたが、左右の位置が反対であり、右足用のブーツだけがソール接地面を上に向けていた。当て革や再縫合による補修は施されておらず、細かい部位の残りも悪くないが、ソール接地面側の縫合ヒモが擦り切れているようにも見えるため、未使用品であるか、着装された常用品であるかの判断は難しい。

No. 7 (2016-6B号墓)：墓坑全体に粗い筵のようなものが掛けられていたが、人形木棺の側板の一部と底板が残るのみで遺存状態は良くない。14~15歳の男性被葬者の両肩の脇に皮革製ブーツが置かれていた (図2-4)。前緒と耳が残るブーツの左足用は顔に近い左肩の横に、右足用は肩から腕の横に位置しており、ソール接地面を上に向けていた。踵には補修用または補強用の当て革が残る。

No. 8 (2010-5号墓)：成人女性の右膝から脛の下あたりから皮革製のサンダル片が出土した。人形木棺に納められた被葬者の遺体には、元来から巻かれていなかったか、あるいは完全に朽ちてしまったため、亜麻布はまったく残っていなかった。両脚は原位置から動いていないように見えるものの、上半身の骨は散乱していたため、皮革製サンダルが原位置を保っていたかどうか疑わしい。また、亜麻布が付着しているため、この成人女性の副葬品ではない可能性もある。

No. 9 (2018-6号墓)：この埋葬は薪を束ねるように、20本ほどのギョリュウ属樹木の枝と細い小枝でミイラを「簀巻き」し、4か所をヒモで巻き留めている。出土した皮革製ブーツは8~9歳の性別不明の被葬者に接しておらず、頭部付近の枝の上に置かれていた (図2-5)。つまり、「棺上」に置かれていたと言える。前緒と耳が残る中間形態のブーツであり、アッパー同士を合わせて上下に重ね、ソール接地面を見せて置かれていた。補修痕は残らないが、縫合ヒモなどがやや摩耗しているため、使用済みの常用品か未使用品かの判断は難しい。他の製品に見られない特徴として、右足用で4か所、左足用で2か所において、アッパーと2層ソールを重ねて一気に切断されている点が

挙げられる（図2-6）。このように意図的に使用を不可能にした履物の出土例は皮革工房址や集落址からもなく、裁断した理由は定かでない。

No. 10（2016-7号墓）：履物を伴う墓として外郭構造を備えた唯一の例である。日乾レンガを縦向きに土坑の内壁に並べ、その上に水平に寝かせた日乾レンガを重ねていた。ほとんど隙間なく安置された人形木棺の上に筵が掛けられていたが、棺蓋は大きく破損していた。20代前半の男性被葬者のミイラの亜麻布もほとんど朽ちており、遺体が露出していた。前緒と耳が残るが、アッパーはほとんど失われている皮革製ブーツが、人形木棺の外側、右肩付近と外郭との間に垂直方向に立てた状態で見つかった。

3-3. 副葬品と常用品

アコリス遺跡南区の墓域から出土した履物の点数は、2種類の履物が副葬されていた墓が2基あるため、10基から計12点（足）となる（表4-1）²⁷⁾。内訳は、皮革製サンダルが1点、皮革製ブーツが7点、植物製サンダルが1点、植物製OPクツが1点、種別不明が2点である。南区全体で出土した皮革製履物のうち、比較的遺存状態が良く、形状や製作技法の観察が可能な製品だけでも100点ほどを数える。他遺跡と比べ出土数が非常に多い点は、アコリス遺跡南区の集落址の特徴の一つである。サンダルとブーツの出土比率は1対1に近い点、副葬品としての履物はブーツの割合が高いと言える。

副葬されていた7点の皮革製ブーツのうち3点は（Nos. 3~5）、赤色に彩色した皮革をアッパーに使っている。ほとんどのブーツが植物タンニン鞣し法による茶褐色を呈しているのとは対照的に、色鮮やかなアッパーを備えたブーツは目を惹くため、明らかに装飾的な効果を意識したものと考えられる。ただし、彩色皮革を使った履物が副葬品として特別に準備された製品とは限らない。No. 5の子供用の赤色皮革製ブーツは未使用品であったが、No. 3とNo. 4のブーツはソール接地面側の縫合ヒモが擦り切れていたり、ソールやアッパーに当て革をして補修していた。つまり、

実際に着装されたことを意味しているからである。

日々の生活のなかで使用された私物の常用品が副葬されたのなら、履物のサイズは被葬者に見合っていると推測される。そこで、現代日本人の平均的な足のサイズを参照しながら、被葬者の年齢と性別における足のサイズ（足長）と、副葬されていた遺存状態の良い履物の大きさを照らし合わせてみる（日本皮革産業連合会 2009, 2013）（表4-1）。まず、No. 3の被葬者は30歳前後の女性で、副葬された皮革製ブーツの大きさ（長さ）が22.1/22.3 cm（左足/右足）であるのに対し、同年齢の現代日本人の足長のサイズは22.0~24.0 cmが最も多い。以下、同様に「副葬された履物の長さ（左足/右足）：同年齢・同性の現代日本人の足長」を挙げていく。No. 4は20.5/20.9 cm：22.5~23.0 cm、No. 5は15.3/15.7 cm：~16 cm、No. 6は20.0/19.5 cm：19.5~21.5 cm、No. 7は24.6/25.1 cm：24.5~25.5 cm、No. 9は22.8/22.2 cm：19.5~20.5 cm、No. 10は23.6/—cm：24.5~26.5 cmである。

以上7例のうちNo. 4とNo. 9の2例は2 cmほど開きがあるものの、推定される被葬者の足のサイズと、副葬された履物のサイズに大きな齟齬はないと言える。むしろ、現代日本人の統計データをそのまま古代エジプト人に当てはめることは問題があり、身長や体重、環境や生活様式によっても足の大きさに差が生じるだろう。しかし、南区で出土した、爪先から踵までのソール全体が残る60点余りの皮革製の履物は、サンダルの最小が9.8 cm、最大が26.1 cm、平均19.3 cm、ブーツの最小が9.1 cm、最大が27.4 cm、平均21.1 cmであり、特定のサイズに集中することなく、さまざまなサイズの履物が出土している（図3）。つまり、自らの足のサイズにあった履物を選択することができたはずである。このことから、副葬された履物は被葬者の足のサイズに見合ったものであり、被葬者が生前に使用していた常用品が副葬されたと考えられるのである。

副葬された履物が常用品であったならば、履物本来の機能を勘案すると、前代までと同様に足元に置かれて然るべきである。ところが、履物を伴う10基の墓

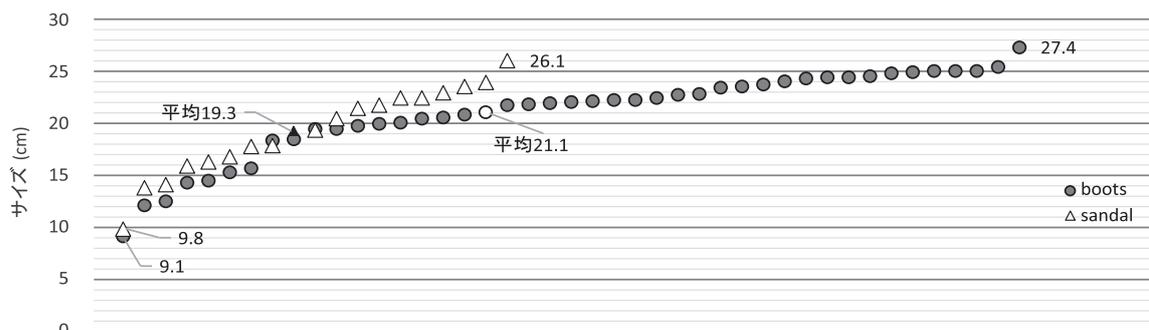


図3 南区出土履物のサイズの散布図

のうち、5基で頭部の下から出土している。肩口に置かれた3基も頭部に近い位置と捉えたならば、10基のうち実に8基で頭部周辺に履物が置かれていたことになる。このことから儀礼的な歩行用具としての履物としてではなく、何らかの意図や願いが込められて副葬されたことが想定される。加えて、被葬者の足のサイズと合わない2例があることも、副葬された履物は歩行用具以外の意味を帯びていたことを示唆している。

4. サンドルの象徴性

4-1. 「サンダルの下に」

副葬品としての履物は家具や化粧用具などと同じように、死後の世界でも現世と変わらぬ生活を送るための常用品の一つとして墓に納められた例が多い。サンダルやブーツなど履物本来の機能は、歩行時に着用することで怪我や汚れから足を保護するためのものである。こうした本来の機能を反映し、履物は足元側に副葬されたと言える。しかし、履物にはいくつかの象徴性が備わっていることから、副葬されたすべての履物が現世あるいは来世での歩行用具ではなかった。

プトレマイオス朝期やローマ期エジプトの木棺の足元(幅面)やカルトナーージュのフット・ケースには、サソリや後ろ手に縛られた捕虜の意匠を持つサンダルを描いたものがある(図4-1)。これらは危険をもたらす存在から身を護ることを祈願した、言わば魔除けとして描かれたものである。あるいは、受動的に身を護るだけでなく、より能動的にさまざまな脅威を排除し、自らの支配下に置くことを願ったものでもあった。このような観念は「(王の、神の) サンダルの下に (*hr ibw*)」という慣用句に表れている。「コフィン・テキスト」や「死者の書」などで使われる際には、「オシリス神の足の下」を意味することが多く、オシリス神が仇敵であるセト神に打ち勝つことで、再生復活への道が拓かれることが暗示されている(Faulkner 1973; Allen 1974)。また、敵に打ち勝つことは混沌に対する秩序の勝利、つまり「マアト」の維持を象徴するものという解釈もある(Taylor 2001:

108)。

敵をサンダルで踏み付けることは、特に王権による敵の平定や土地の支配を象徴していた。この観念は王朝時代の開始期にはすでに確立されていたと推測される。第1王朝のナルメル王(Narmer)の奉献用化粧パレットの両面には、棍棒で敵を打ち据えたり、都市に凱旋した裸足のナルメル王の姿が描かれており、王のすぐ背後に控える従者がサンダルを手にしてしている。また、奉献用の大型の棍棒頭でも同様に、後ろ手に縛られた捕虜たちを前にして玉座に座るナルメル王の背後にサンダルを持った従者が控えている(Quibell 1900; Millet 1990; Fairservis Jr. 1991)。サンダルは王の持ち物ではなく、従者自身の名前を表しているとする異見もあるが(Fairservis Jr. 1991)、サンダルを手にした従者が王のすぐ背後に立ち、他の人物よりもやや大きく描かれていることは、「王のサンダル持ち」の役職が高位であり、サンダルが強い象徴性を持っていることを示唆している。第2王朝のカーセケムウイ王(Khasekhemwy)の戦勝記念碑には、「外国の土地に対して効果的なサンダル」という王の形容辞が記されているとのことなので(Wilkinson 2005: 209)、サンダルは王の持ち物であり、王権による土地の平定と支配の象徴であったと考えられる。

ただし、サンダルそのものがこれらを直接的に象徴するのではなく、別の意匠を介することによって可視化されていた。それが、王の倚像の足の下やサンダルのインソールなどに描かれた、後ろ手に縛られた捕虜や、外国の敵を意味する9本の弓を並べた「九弓」である(Wilkinson 1992: 184-185; Ritner 1993: 113-136; Pinch 1994: 85)。ルクソール西岸のマルカタ南遺跡「魚の丘」(Malkata South, Kom el-Samak)のアメンホテプ3世(Amenhotep III)葬祭殿では、捕虜と2本1組の弓が交互に描かれた階段が検出されており(Watanabe and Seki 1986)、トゥトアंकアモン王の混交素材製サンダルのインソールにも捕虜と「九弓」が装飾されている(Veldmeijer 2010a: 87-95)。これらを王が象徴的に、あるいは実際に踏み付けることで、王権による平定や支配を体現



図4 履物の象徴性

1. 「サンダルの下に」(カルトナーージュのフット・ケース) 2. 「白いサンダル」(木製模造サンダル) 3. 履物を「枕」にしたミイラ(2007-2号墓)

していたのである。しかし、王墓以外でもサンダルの副葬は一般的であったため、副葬されたサンダルのすべてが王権による敵の平定や土地の支配を象徴していたのではない。敵や危険物を踏み付けて打ち倒すことは、障害や困難を排除することであり、それによって安全や平穏がもたらされると解釈しても良いだろう。つまり、履物は魔除け・厄除けの機能を持っていたと言える。

4-2. 「白いサンダル」

履物が示すもう一つの象徴性は、文字史料にたびたび登場する「白いサンダル (*ḥdty/šsp ḥdty*)」である。現代においても、それぞれの色彩は特定のイメージや象徴性と結びついているように、古代エジプトにおける「白色 (*ḥd*)」は儀礼的な清浄性や純粋性、神聖性を表していた (Wilkinson 1994: 109)。履物を着用して汚れから足を保護することは、足を清潔に保つことであり、それに「白色」の象徴性が相まって、「白いサンダル」は清浄や無垢を意味していた (Schwarz 2000: 230-231; Hagen 2010: 198; Maitland 2018: 51)。

第1中間期末の第10王朝に編まれた『メリカラー王への教訓』には、王としての正しい振る舞いが訓えられている。神を崇敬するように説かれた一節のなかに「(前略) 神官の月々の勤めをすべきだ。白いサンダルを履き、神殿を訪れ、神秘を明らかにし、至聖所にはいり、神殿にてパンを食べるべし」という一文がある (屋形・杉沢 1978: 522)。これは神殿での祭祀に臨む神官(王)が「白いサンダル」を着用することで、自身の清浄性を示していたことが窺える。また、ヘロドトスの『歴史』にも、エジプトの神官が清潔を重んじており、亜麻布製の衣服と植物製(パピルス製)のサンダルしか身に着けてはいけなかったことが記されている (ヘロドトス、松平訳 1971: 185 [II 37])。「ハリス・パピルス」には、第20王朝のラメセス3世 (Rameses III) が15,110足もの植物製サンダルと、3,720足の皮革製サンダルを神殿に寄進したことが記録されており (Breasted 2001 (1906): vol. 4, § 241)、神殿におけるサンダルの消費量が膨大であったことが分かる。おそらく、神官は着用するサンダルを毎日新調することで、神々の世話をする自らの清浄性を示していたと推測される。

また、「白いサンダル」は神官だけでなく、死者も身に着けていた。「死者の書」第125章の「否定告白」の場面では、死者は生前に悪行を犯していないことを42柱の神々の前で告白し、来世に向かう資格を有しているかどうかの審判を受ける。その際、死者は清潔な衣服と白いサンダルを身に着け、アイメイクを施し、香油を塗って、告白に臨む必要があった (Allen 1960: 201; Calvert 2011: 185)。つまり、死者は「白

いサンダル」を着装することによって、自身が清廉潔白であることを証明していたのである。中王国時代に流行した、白く塗色された木製模造サンダルや (図4-2)、オブジェクト・フリーズに描かれた白色のサンダルは、こうした死者が身に着ける「白いサンダル」を具現化したものと推測される。また、壁画に描かれるサンダルも白色に塗布されており、美術規範として定められていたことが窺われる。サンダルに対して白色が選択された理由は「白いサンダル」の観念から導かれたのだろう。

「白いサンダル」は自身が清らかであることを証明し、清浄な神域や聖域を穢すことを防ぐために着装したものと考えられるが、一方で、現代でも宗教施設や清潔な場所に入る際に靴を脱いで裸足になる習慣が世界各地に見られる。この場合、履物は日常や俗世における使用で物理的に汚れているため、聖域では脱ぐ必要がある。これらの違いは、人間と大地のどちらを不浄とみなすかという視点の違いに起因すると言えよう。つまり、人間を不浄とみなしたならば、履物によって清浄な大地が護られ、反対に大地が不衛生であったり、サソリや石などの危険があれば、履物によって自身が護られるのである。いずれにせよ、履物が「護る」という機能を持っていることに変わりはない。そのため、「白いサンダル」は清浄性を示すだけでなく、魔除けや厄除けとして「護る」機能も備えていたとされる (Schwarz 2000: 231-232)。

5. アコリス遺跡南区の副葬された履物

5-1 履物に込めた願い

王朝時代を通じてさまざまな素材の履物が製作されたが、そのすべての素材の履物が副葬品として確認されている。副葬された履物の意味や象徴性を検討する際、金などの特別な素材である場合を除き、素材の違いに特別な意味を見出すことは難しい。皮革製品や皮革業は、屠体、腐敗、悪臭などの負のイメージを持たれることが多く、忌避される存在であったと認識されがちである。そのため、獣毛や皮革製品は不浄なものであったとする見解もあるが (Pinch 1994: 77)、古代エジプトにおいて、皮革製品や皮革業が蔑視されていたという明証はない。もし、皮革製品が不浄なものとして扱われていたのであれば、王族やエリート層の墓に皮革製の履物が副葬されることはなかっただろう。したがって、副葬品としての履物は素材の別に意味を見出すのではなく、履物自身に意義があったと解釈する方が良い。また、履物の形状はサンダルとブーツに大別されるが、特殊な形状のOPクツなども副葬されており、形状と象徴性の間にも関連性は見出せない。

さらに色彩についても同じことが言える。新王国時代以降になると、茶褐色の植物タンニン鞣し皮革、赤色と緑色の彩色皮革、クリーム色あるいは黄白色の植物、光り輝く金や銀、多色のガラス製ビーズなど、さまざまな色彩をした素材で履物が製作され、それらが副葬された。ところが、第1中間期から中王国時代に流行した白色に塗布された木製サンダルや、あるいはミョウバンや植物油脂を鞣し剤として白色（明色）に仕上げた皮革を使った履物など、白色をした履物の副葬例は知られていない。「白いサンダル」の語は新王国時代以降も文字史料に頻繁に登場しており、その概念自身が失われたわけではない。そのため、観念的な「白いサンダル」を具現化したものとして履物を副葬する際に、その色彩を物理的に白色としなくなったことが推察される。つまり、副葬された履物が白色のサンダルでなくても、「白いサンダル」の象徴性を備えていた可能性がある。

古代エジプトにおける副葬された履物の機能と象徴性をまとめると、第一に、現世での私物や愛蔵品であり、来世やその途上での歩行時に装着する常用品であった。次に、「サンダルの下に」の慣用句から導かれる安全や平穩、あるいは、「白いサンダル」の語が表す清浄性や無垢を象徴するものでもあった。そして、新王国時代になると、新しい形状の履物であるブーツが登場し、赤色や緑色の彩色皮革を使った履物が増加する。履物の種類が増えたことに伴って、副葬される履物は素材、形状、色彩といった各要素に紐づく象徴性よりも、履物であること自身に意義が見出されるようになったことが推測される。すなわち、履物元来の「護る」機能が重視され、魔除けや厄除けの護符としての役割の比重が大きくなったと言えるだろう。

アコリス遺跡南区の庶民墓では、履物が唯一の副葬品である例も少なくないため、単なる常用品であったとは言い難い。むしろ、来世に旅立つ被葬者が清浄無垢であることを証明し、その道中における厄災を打ち払うことを願った護符として解釈するのが妥当であろう。この場合には足元に副葬する必要はない。それでは、履物の出土位置が頭部周辺に集中することはどのような意味を持っていたのだろうか。

5-2 「枕」としての履物

家屋模型や小像の意匠から、古代エジプト人は日常的に枕を用いていたと考えられるが、枕の出土例のほとんどが墓の副葬品である。枕の副葬はサンダルと同様に王朝時代を通じて見られ、鏡や家具などとともに死後の世界に持参する一般的な常用品の一つであった。その素材はさまざまであり、木製を中心として、石製や土器製、あるいはガラス製や象牙製などの枕が知られている (LÄ, *Kopfstütze*: 686-690)。古代エ

ジプトの一般的な枕の形状は、台座から立ち上がった軸の上に、両端が上向きに湾曲した扁平な部位を持つ高枕（ヘッドレスト）がほとんどである。これは「枕」を表すヒエログリフサイン (*wrs*; Gardiner Q4) にもなっている²⁸⁾。高さの平均は 15 cm ほどとされ (Summers 2016: 231)、側臥位で頭を載せて使用していたことが古代エジプトの小像や、現代アフリカの民族例などから知られる。また、台座と軸がなく、ブロック状の石の中央部が窪んでいる低い枕も少数だが知られており、こちらは「山」あるいは「地平」を表すサイン (*dw*; Gardiner N26/N27) と似ている。

副葬された高枕には安眠を願う呪文が刻まれていたり、家庭を守護し、ヘビやサソリなどの邪悪なものを遠ざけるベス神などの姿が表されており、悪夢除けや魔除けの役割を果たしていた。また、枕の軸は腕の形をしたものや、大気の神シュウの姿で表されたものがあり、その腕やシュウ神が頭を高く持ち上げて、支えているように見える意匠となっている。枕はヒエログリフサインの「山」や「地平」を表すサインと似ているため、枕に載せた頭は昇ってくる太陽と同一視された。そして、古代エジプト語の「枕 (*wrs*)」と「起きる (*rs*)」の音価に共通性が見られるように、高枕を使うことは死者が起きること、つまり再生復活の来世観と結びついていた (Wilkinson 1992; Pinch 1994; Hellinckx 2001; Perraud 2002; Szpakowska 2003, 2011; Summers 2016 など)²⁹⁾。

「死者の書」第 166 章は「枕の章」と呼ばれており、そこには、死者が頭を上げて起き上がることや、神々が敵を打ち倒したために、頭が持ち去られる危険が去ったことが記されている (Budge 1898: 296-297; Allen 1974: 162)。再生復活に際して、死者の頭部を護ることは非常に重要であり、その役目を果たす枕の副葬も重視されていたと考えられる。枕が果たす「魔除け」や「護る」、「敵を打ち倒す」といった役割は、履物が持つ象徴性や機能と重ね合わせることができる。したがって、アコリス遺跡南区で検出されたミイラの頭部の下に置かれた履物は枕の代用品であったと考えられる (図 4-3)。頭部周辺に置かれた履物も、歩行用具としてではなく、頭を護るための護符の役割を果たすことを意図していたのである。

末期王朝時代第 26 王朝からプトレマイオス朝期にかけて、ギリシア語で「頭の下」を意味する「ヒュポケファルス (*hypocephalus*)」と呼ばれる円盤状の護符が、枕の代わりにミイラの頭の下に置かれることがあった (Pinch 1994; Shaw and Nicholson 2008; Mekis 2013)³⁰⁾。直径 15 cm ほどを測るヒュポケファルスの円盤の周囲には、「死者の書」の第 162 章の呪文が記され、中央に挿絵が描かれている。第 162 章は

「死者の頭の下に熱を与える」ための呪文であり、その熱が死者の再生復活をもたらすと考えられていた。挿絵の多くは3~5段に分けられ、中央で図像の天地が逆転している。この上下段は太陽神の運行に伴う昼夜を表しており、再生復活を象徴した内容と解釈されている (Rhodes 1977; Miatello 2008)。ヒュポケファルスは短期間の流行であったが、第3中間期に続く時代にも、枕に代わる護符で頭部を儀礼的に保護し、死者の再生復活を強く願う伝統が続いていたことを考慮すると、第3中間期のアコリス遺跡南区の墓に副葬された履物が同様の機能を持っていたとしても不思議ではない。

6. 結語

古代エジプトで副葬された履物は、来世での歩行用具としての常用品であった。加えて、「サンダルの下に」踏み付けた外敵などの障害を取り除くことで、平穏や安全をもたらす護符としての機能を持ち、「白いサンダル」を具現して、審判に臨む死者の魂の清廉潔白を証明するものでもあった。アコリス遺跡南区の墓から出土した履物は、こうした王朝時代の伝統的な象徴性や機能に加えて、死者の頭部を保護する枕の機能を併せ持ち、無事に再生復活する願いを込めて副葬するものであったと考えられる³¹⁾。つまり、アコリス遺跡南区に暮らした庶民層もまた、一般的なイメージで語られる「古代エジプト人」と同様の伝統的な死生観・来世観を抱いていたと言える。しかし、これは彼らの死生観・来世観の一側面に過ぎない。アコリス遺跡南区に暮らした庶民層は文字を解せず、国家的な神々の体系に疎く、現世利益を求める民間信仰的な慣習も持ち合わせていた。また、埋葬形態を見ても、さまざまな植物を「棺」として利用し、枕の代用品として履物を用いるなど、伝統の枠に収まらない独自の面も併せ持っていたのである³²⁾。

註

- 1) アコリス遺跡の南区の調査については、調査概報の *PR AKORIS* (Kawanishi et al. eds. 2003~ *Preliminary Report Akoris 2002*~) を参照のこと (<http://akoris.jp/archive.html> からダウンロードが可能)。数字は調査年度を表す。ただし、本稿に関連する内容を個別に取り上げる際には、それぞれの執筆者の氏名を記す。末期王朝時代やグレコ・ローマン時代を含むアコリス遺跡の都市や集落の形成などについては、川西 1999、2015、周藤 2014などを参照のこと。また、他遺跡の事例では、1基の墓に複数の被葬者が埋葬されている例も多い。そこで以下では、数え方の単位として、墓は「基」、埋葬は「件」とする。
- 2) 南区から南へ延びる岩丘西面に、ラメセス3世がアメン・ラー神と並んでソベク神に相対する磨崖碑が残っている。また、岩山に造られたシャフト墓からは大量のワニのミイラが見つかった。
- 3) アコリス遺跡南区の出土遺物のなかで、このほかに民間信仰、あるいは庶民層に特有の護符の要素を持つものとして、人毛の短い三つ編みの束や、黒色研磨された土製「ゲーム駒」などが挙げられる。
- 4) 南区の墓域における被葬者の年齢と性別は辻村純代氏の知見によるものであり、原則として、調査概報に記された内容に従っている。棺の種類、被葬者の頭位方向、副葬品の種類などについては、花坂 2020 に詳述している。ただし、副葬品の有無については、亜麻布の内側に巻き込まれた未見のものなど、未確認の例があると思われる。実際、2020年1月に2015-6号墓の被葬者の首にネックレスが巻かれていることが新たに判明した。被葬者は箱式木棺に納められた、頭部を北に向けた性別不明の幼児である。また、2019~2020年の発掘調査で、円形倉庫から3体分の人骨が見つかった。このうち10代前半の女性の頭蓋骨の脇から、亜麻布の付着したブーツが1点出土した。これは頭部付近に副葬されていたブーツと一緒に遺棄された可能性がある。その他の副葬品らしき遺物は見つかっていない。
- 5) 一般的に日本語では「アシ」、英語では「reed」と呼ばれる植物と考えられる。古代エジプトでは、*Phragmites australis*、*Arundo donax*、*Saccharum spontaneum* などいくつかの種類が知られており、いずれも英語では「reed」と総称されている。
- 6) ここでは、サンダルを「足甲と踵、またはそのどちらかをストラップで留める履物」、ブーツ(クツ)を「足の大部分をアッパーが覆う履物」と定義する。しかし、足甲が開いたアッパーを持つ「OPクツ」や、前緒と横緒を有した中間形態のクツもあるため、履物の種別をサンダルとクツの2種に単純に分けることは難しい。
- 7) ブーツの初現はサンダルよりもずっと遅く、最古の例として、中王国時代第12王朝のベニ・ハサン (Beni Hasan) 遺跡の墓にブーツを履いた「アジア人 (Aamu)」が描かれている。初期の出土例は新王国時代第18王朝後半の皮革製のブーツが何例か挙げられる。しかし、出土数が増加する時期や、当時の最先端技術や流行が集約していたと考えられる、テル・エル＝アマルナ遺跡やトゥトアଙ୍କアモン王墓 (KV62) などからの出土例がないことを勘案すると、ブーツの製作と使用が定着するのは第19王朝以降のことと考えられる。
- 8) OPクツは「open shoes」の略であり、足甲の部分はアッパーが覆っておらず、ソールから立ち上がった低いアッパーが足の側面だけを囲むボートのような形状をしている (Veldmeijer 2009a)。前緒と横緒を有していることから、サンダルとよぶべき履物かもしれないが、ここでは便宜的に「OPクツ」とする。植物製OPクツの類例は比較的多く知られており、ソールやアッパーの編み方で細分も可能であるが、皮革製OPクツの例は2例しか知られていない (Veldmeijer 2009b, 2009c)。
- 9) 古代エジプトの皮革製品と履物の研究は、A. J. ベルドメイヤー (Veldmeijer) が主宰する Ancient Egyptian Leatherwork and Footwear Project によって推進されており (<http://www.leatherandshoes.nl/>) (2019年12月確認)、最近、考古資料を総括する書物が出版された (Veldmeijer 2019)。「ステッチダウン製法」はアッパーの端部を外側に折り曲げてソールとの縫い代とし、ソールと縫合する製法である。
- 10) ジェベレイン遺跡出土とされる詳細不明のサンダル (Museo Egizio, Turin: S.294.01/02, S.279.01/02) は、ソールから複数の長いストラップを切り出し、ストラップの先端に開けた孔に別のストラップを通してひと続きのものとし、爪先、足甲、足首、踵を留める「ストラップ・ワー

- ク」のサンダルである。こうしたサンダルを表したと思われる象牙製品は、アビドス遺跡 Cemetery U (ウンム・エル＝カアブ Umm el-Qa'ab) の 190 号墓からも出土している。ソールの外縁に切れ込みを入れる点で、王朝時代の「耳付きサンダル」と共通しているとも言えるが、むしろ、同じ前 4 千年紀のイスラエル、ウォリアー洞窟 (Cave of the Warrior) 出土のサンダルに似ている (Israel Museum K23993/K23994)。
- 11) サッカラ遺跡 3504 号墓出土のサンダルのうち 1 組は、ロンドン大学ペトリ博物館に所蔵されている (UC30463)。サンダルと同じ室から象牙製のゲーム駒や木製家具の装飾部が出土しており、矢筒と思われる皮革製品や植物製マット片なども出土している (Emery 1954)。
 - 12) 中王国時代の埋葬関係の参考文献収集に際して山崎世理愛氏にご助力頂いた。ここに記して感謝の意を表します。
 - 13) 93 点が出土したとも言われているが、そのなかには履物以外の皮革製品が含まれている可能性がある (Veldmeijer 2010a: 19-41)。
 - 14) メトロポリタン美術館所蔵 (MET36.3.159a, b)。なお、アメンホテプ墓との関係性は不明であるが、周辺の堆積層から長さ 12.5~13.5 cm の植物製サンダル (36.3.234 a, b) と、長さ 13.5 cm の白色の皮革製サンダル (36.3.235 a, b) も見つかっている。
 - 15) アニ墓出土の副葬品に関しては大英博物館の HP を参照。
(https://www.britishmuseum.org/research/collection_online/collection_object_details.aspx?searchText=Ani%20tomb&LINKID=34484&assetId=544679001&objectId=119601&partId=1) (2019 年 12 月閲覧)。
 - 16) トウトアムン王の金製サンダル (Cairo JE60678, 60679)、プスセネス 1 世の金製サンダル (Cairo JE85842)、シェションク 2 世の金製サンダル (Cairo JE72166) はカイロ博物館、トウトモセ 3 世の妻の金製サンダル (MET 26.8.146-148) はメトロポリタン美術館所蔵。
 - 17) 4 つの遺跡 (地域) は、サッカラ、マトマール、デイル・エル＝バハリ (Deir el-Bahri)、ラメセウム地区 (Ramesseum Area) である (Aston 2009)。
 - 18) 「ハルファ」と通称される植物はほかにもいくつかの種類が知られている (Borojevic and Mountain 2013; Ibrahim et al. 2016)。
 - 19) アコリス遺跡の皮革工房址と南区で出土した履物の詳細については、花坂 2019 に詳述している。
 - 20) 4 歳以上の子供の足長に関する統計は日本皮革産業連合会が行っているが、3 歳以下の乳幼児の統計は取っていない。乳幼児の足長を 12~15 cm としたのは、幼児靴の設計のための論考やインターネットのページを参照した。なお、アコリス遺跡南区で出土した最小の履物は、長さ 9.05 cm、ソール幅 3.85 cm の小さなブーツである (PR Akoris 2018)。
 - 21) 南区の墓の多くが土坑を掘っただけの簡素な構造であり、木棺なども朽ちて遺存していない例も多いため、盗掘を受けているか否かの判断は難しい。しかし、土坑および周辺の埋土の堆積状況から、南区で検出されたほとんどの墓は未盗掘であったと考えられる。
 - 22) Ancient Egyptian Footwear Project の分類では「Sewn-Edge Plaited Sandals」と呼ばれる種類にあたる (Veldmeijer 2010b, 2019)。
 - 23) 2019 年に国士舘大学イラク古代文化研究所で開催された「オリエント研究の最前線」および「古代エジプト アコリス出土のミイラ展」の 2 つの企画展に合わせて、江添誠氏 (国士舘大学イラク古代文化研究所) の主導のもと、杉本真樹氏 (帝京大学、HoloEyes)、高野英行氏 (千葉県がんセンター)、山本正二氏 (Ai 情報センター) の協力を得て、この女性ミイラの CT 画像の解析が再び行われた。それによって、X 線写真よりも鮮明に、左手首に巻かれたスカラベの存在が明らかとなった。また、脳、心臓、肝臓、肺が残っているだけでなく、眼窩に眼球以外の何らかの物質が残っているという指摘もあった。ガラスや石といった硬質の物質ではないとのことなので、芳香を高める、あるいは悪臭を沈める目的のためにタマネギなどが置かれていた可能性がある。展示や解析に関して、上記の諸氏にご尽力頂いた。ここに記して深く感謝の意を表します。
 - 24) 通常の赤色彩色の方法は、まず、植物油脂あるいはミョウバン鞣し法によって白色・明色の皮革を得る。続いて、レッドオーカーなどの酸化鉄系の顔料を表面 (銀面側) だけに塗布して着色するか、またはミョウバンを媒染剤とするアカネを使って染色する。しかし、この赤色皮革製ブーツは植物タンニンで鞣した褐色の皮革に彩色しているため、赤色の発色が良くない。
 - 25) 土坑の足側の埋土だけが攪乱しており、人形木棺の蓋も足元側だけが壊れている。さらにミイラの頭が外れ、亜麻布も解かれており、外れた右手を亜麻布で丁寧に包み直してあった。つまり、非常に不思議な話ではあるが、古代に盗掘が試みられ、盗掘者は蓋を外し、一端ミイラを取り出した。そして、ミイラを棺内に戻し、壊した蓋の部分に日乾レンガと石を置いて封をした可能性がある。
 - 26) カイロの農業博物館に展示されている類例品 (no. 648) には、無彩色の円形部分を挟む把手が付属する。ただし、現状の把手は固定されておらず、「円扇」として使用できるか疑問である。また、カイロ博物館に植物編み籠とともに展示されている類例品は (JE25990, JE25991) は、G. マスペロ (Maspero) によってアクミム (Akhmim) で発見されたものとされるが、出土位置などの詳細は不明である。アコリス出土の製品と製作技法は類似しているものの、配色が異なり、より装飾的な文様が施されている。もっとも類似しているのが、ロンドン大学・ペトリ博物館所蔵の製品である (UC59059)。1 本 1 本の植物帯がアコリスの製品よりも細く、段数が多いが、中央部が黒/緑 (青) 色と赤色で装飾されており、端部も黒/緑に彩色した植物帯が巻き付けられている点で共通している。ペトリ博物館のホームページには「編み籠の蓋」と紹介されているが、出土遺跡や時代などの情報はない。他にモスクワのプーキン美術館にも類例品が所蔵されている (IG3303)。これらの円盤型の植物製品を「ヒュポケファルスの類似品 (擬似品)」として言及した論文もあるが (Mekis 2013: 23-26)、アコリス遺跡では、頭部の下ではなく胸の上から出土していることから、ヒュポケファルスの前段階の製品とは考えにくい。
 - 27) ほとんどが左右の両方がセットになった 1 足 (1 組) で出土しているが、左右どちらか片方しか出土していない例もある。そこで、左右 1 足の場合でも 1 点と数える。
 - 28) ローマ字と数字は、A. ガーディナー (Gardiner) によるヒエログリフサインのリスト番号を示す。
 - 29) 高枕は遅くとも第 3 王朝には使われていたが、「地平から昇る太陽」(Gardiner N27) のヒエログリフサインは第 5 王朝になってから使われるようになったため、頭を太陽に見立てて、再生復活と結び付ける象徴性は高枕の登場当初からあったものではないと考えられている (Hellinckx 2001: 77)。
 - 30) ヒュポケファルスは 150 点ほどが知られており、多くは亜麻布に漆喰を塗った薄手のものである。パピルスや青銅製の製品もいくつか知られている。
 - 31) 古代エジプト語で「生命」を表すアंक (*ankh*) のサイ

- ン (Gardiner S34; 輪に十字) はその原形・由来が分かっておらず、「紐の結び目」や「鏡」など様々な解釈が提示されている。そのなかで、A. ガーディナーはサンダルのストラップに由来する可能性を指摘している (Gardiner 1915)。彼がまとめたヒエログリフのサインリストでもアंकとサンダルを並べている。そのためか、この解釈は広く知られるところとなり、現在も多くの書物で紹介されている。この解釈を受け入れるのであれば、再生復活の願いを込めて副葬されたアコリス遺跡南区出土の履物と、「生命」を表すアंकとの関連性が想起される。しかし、ガーディナー自身は「生命 (アंक)」と「サンダルストラップ」の間に明確な関係性は見いだせず、アंकの原形・由来を確かめることはできないと述べている (Gordon and Schwabe 2004: 102-103)。また、第1王朝にはすでにアंकを象った製品が知られているのに対し、その時代のサンダルは輪となる踵ストラップを持たない。ヒエログリフサインの「サンダル」(Gardiner S33) にも踵ストラップが描かれておらず、皮革以外の素材の履物にも踵ストラップは付属しない。したがって、アंकがサンダルストラップに由来するとの解釈は受け入れ難く、本稿では履物の象徴性を検討する際の対象から除外した。
- 32) テル・エル＝アマルナ遺跡の墓域の調査から、頭位方向などは家族などの社会集団によって継承されていた「小さな伝統 (mini-traditions)」に基づく可能性が指摘されている (Kemp 2007; 和田 2008)。ただし、アコリス遺跡南区の墓では、近接する墓同士でも頭位方向や副葬品などに共通性はない。
- 参考文献**
- 略号: PR AKORIS. Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2003~ *Preliminary Report Akoris 2002*~. University of Tsukuba/Nagoya University, Akoris Archaeological Project.
- Allen, T. G. 1960 *The Egyptian Book of the Dead: Documents in the Oriental Institute Museum at the University of Chicago* (OIP82). Chicago, The University of Chicago Press.
- Allen, T. G. 1974 *The Book of the Dead or Going Forth by Day: Ideas of the Ancient Egyptian Concerning the Hereafter as Expressed in their Own Terms* (OIP 37). Chicago, The University of Chicago Press.
- Aston, D. A. 2009 *Burial Assemblages of Dynasty 21-25: Chronology-Typology-Developments*. Wien, Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Borojevic, K. and R. Mountain 2013 Microscopic Identification and Sourcing of Ancient Egyptian Plant Fibres using Longitudinal Thin Section. *Archaeometry* 55(1): 81-112.
- Breasted, J. H. 2001 (1906) *Ancient Records of Egypt*, vol. 4. Illinois, University of Illinois.
- Brunton, G. 1948 *Matmar: British Museum Expedition to Middle Egypt 1929-1931*. London, Bernard Quaritch Ltd.
- Budge, E. A. W. 1898 *The Book of the Dead: The Chapters of Coming Forth by Day*. London, Kegan Paul.
- Calvert, A. M. 2011 *The Integration of Quantitative and Qualitative Research in a Study of the Regalia of Remeses III*. Ph. D. dissertation, New York University.
- Cooney, K. M. 2011 Changing Burial Practices at the End of the New Kingdom: Defensive Adaptations in Tomb Commissions, Coffin Commissions, Coffin Decoration, and Mummification. *Journal of the American Research Center in Egypt* 47: 3-44.
- Davies, T. M. 1908 *The Tomb of Siptah: The Monkey Tomb and the Gold Tomb*. London, Archibald Constable.
- Emery, W. B. 1954 *Great Tombs of the First Dynasty II*. London, Egypt Exploration Society.
- Fairservis Jr., W. A. 1991 A Revised View of the Na^crmer Palette. *Journal of the American Research Center in Egypt* 28: 1-20.
- Faulkner, R. O. 1973 *The Ancient Egyptian Coffin Texts, vol. I, Spells 1-354*. Warminster, Aris and Phillips.
- Gardiner, A. 1915 Life and Death (Egyptian). In J. Hastings (ed.), *The Encyclopedia of Religion and Ethics*, Vol. 8, 19-25. New York, Charles Scribner's Sons.
- Gordon, A. H. and C. W. Schwabe 2004 *The Quick and the Dead: Biomedical Theory in Ancient Egypt*. Leiden, Brill.
- Hagen, F. 2010 New Kingdom Sandals: A Philological Perspective. In A. J. Veldmeijer (ed.), *Tutankhamun's Footwear: Studies of Ancient Egyptian Footwear*, 193-203. KS Norg, Druk Ware.
- Hanasaka, T. 2010 Leather Workshop/Leather Footwear. In PR AKORIS 2009, 10-17.
- Hanasaka, T. 2012 Clay Cobra Figurines Unearthed from Akoris (Tihna el-Gabal). In PR AKORIS 2011, 4-14.
- Hanasaka, T. 2014 Clay Magical Human Figurines Unearthed from Tihna el-Gabal (AKORIS). In PR AKORIS 2013, 7-13.
- Hanasaka, T. 2017 The Intermediary Leather Footwear from Sandals to Shoes. In PR AKORIS 2016, 17-19.
- Hayes, W. C. 1990a (1953) *The Scepter of Egypt: A Background for the Study of the Egyptian Antiquities in the Metropolitan Museum of Art, Part I: From The Earliest Times to The End of The Middle Kingdom (Before 1600 B.C.)*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Hayes, W. C. 1990b (1959) *The Scepter of Egypt: A Background for the Study of the Egyptian Antiquities in the Metropolitan Museum of Art, Part II: The Hyksos Period and the New Kingdom (1675-1080 B.C.)*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Helck, W. and E. Otto (eds.) 1980 Kopfstütze. *Lexikon der Ägyptologie (LÄ)*, Band III, 686-693. Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Hellinckx, B. R. 2001 The Symbolic Assimilation of Head and Sun as Expressed by Headrests. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 29: 61-95.
- Humphreys, R. 2010 *Matmar: Revisiting Burial Practice of the Non-Elite during the Third Intermediate Period*. Master of Philosophy Thesis, The University of Birmingham.
- Ibrahim, K. M., H. A. Hosni and P. M. Peterson 2016 *Grasses of Egypt*. Washington, D. C., Smithsonian Institution Scholarly Press.
- Janssen, J. J. 1966 A Twentieth-Dynasty Account Papyrus (Pap. Turin No. Cat. 1907/8). *The Journal of Egyptian Archaeology* 52: 47-72.
- Janssen, J. J. 1975 *Commodity Prices from the Ramessid Period: An Economic Study of the Village of Necropolis Workman at Thebes*. Leiden, Brill.

- Jéquier, G. 1921 *Les Frises d'Objets des Sarcophages du Moyen Empire*. Cairo, Mémoires publiés par l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Kemp, B. J. 2007 The Orientation of Burials at Tell el-Amarna. In Z. A. Hawass and J. Richards (eds.), *The Archaeology and Art of Ancient Egypt, vol. II*, 21-31. Cairo, American University in Cairo Press.
- Lilyquist, C. 2003 *The Tomb of Three Foreign Wives of Tuthmosis III*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Maitland, M. 2018 Dirt, Purity, and Spatial Control: Anthropological Perspectives on Ancient Egyptian Society and Culture during the Middle Kingdom. *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 17: 47-72.
- Mekis, T. 2013 *A Hypocephalok*. Ph. D. thesis, Eötvös Loránd University.
- Miatello, L. 2008 The Hypocephalus of Takerheb in Firenze and the Scheme of the Solar Cycle. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 37: 277-287.
- Millet, N. B. 1990 The Narmer Macehead and Related Objects. *Journal of the American Research Center in Egypt* 27: 53-59.
- Niwinski, A. 1988 *21st Dynasty Coffins from Thebes: Chronological and Typological Studies*. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Perraud, M. 2002 Appuis-tête à Inscription Magique et Apotropaïa. *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 102: 309-326.
- Pinch, G. 1994 *Magic in Ancient Egypt*. London, The British Museum Press.
- Podvin, J.-L. 2000 Position du Mobilier Funéraire dans les Tombes Égyptiennes Privées du Moyen Empire. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 56: 277-334.
- Quibell, J. E. 1900 *Hierakonpolis, Part I*. London, Bernard Quaritch.
- Raven, M. J. 2005 Egyptian Concepts on the Orientation of the Human Body. *The Journal of the Egyptian Archaeology* 91: 37-53.
- Rhodes, M. D. 1977 A Translation and Commentary of the Joseph Smith Hypocephalus. *BYU Studies Quarterly* 17: 259-274.
- Ritner, R. K. 1993 *The Mechanics of Ancient Egyptian Magical Practice*. Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Schwarz, S. 2000 *Altägyptisches Lederhandwerk*. Frankfurt am Main, Peter Lang.
- Shaw, I. and P. Nicholson 2008 (1995) *The British Museum Dictionary of Ancient Egypt*. London, The British Museum Press.
- Smith, S. T. 1992 Intact Tombs of the Seventeenth and Eighteenth Dynasties from Thebes and the New Kingdom Burial System. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 48: 193-231.
- Summers, J. 2016 Pillows for a King: The Headrest of Ancient Egypt and Tomb KV62. *European Scientific Journal* July 2016/Special/ Edition: 229-237.
- Szapowska, K. 2003 *Behind Closed Eyes: Dreams and Nightmares in Ancient Egypt*. Swansea, The Classical Press of Wales.
- Szapowska, K. 2011 Demons in the Dark: Nightmares and Other Nocturnal Elements in Ancient Egypt. In P. Kousoulis (ed.), *Ancient Egyptian Demonology: Studies on the Boundaries between the Demonic and the Divine in Egyptian Magic*, 63-76. Leuven, Uitgeverij Peeters en Department Oosterse Studies.
- Taylor, J. H. 1989 *Egyptian Coffins*. Aylesbury, Shire Publications.
- Taylor, J. H. 2001 *Death and the Afterlife in Ancient Egypt*. London, The British Museum Press.
- Taylor, J. H. 2003 Theban Coffins from the Twenty-second to the Twenty-sixth Dynasty: Dating and Synthesis of Development. In N. Strudwick and J. H. Taylor (eds.), *The Theban Necropolis Past, Present and Future*, 95-121. London, The British Museum Press.
- Tsujimura, S. 2014 Third Intermediate Period Burials at Akoris. In *PR AKORIS 2013*, 14-20.
- Tsujimura, S. 2018 Investigation of the Mummy (Grave 4 in 2016). In *PR AKORIS 2017*, 16-18.
- Uchida, S. 2016 Anthropoid Coffin from Tomb 5 in 2014. In *PR AKORIS 2015*, 13-15.
- Veldmeijer, A. J. 2009a Studies of Ancient Egyptian Footwear, Technological Aspects, part XII: Fiber Shoes. *British Museum Studies in Ancient Egypt and Sudan* 14: 97-129.
- Veldmeijer, A. J. 2009b Studies of Ancient Egyptian Footwear, Technological Aspects, part XVI: Leather Open Shoes. *British Museum Studies in Ancient Egypt and Sudan* 11: 1-10.
- Veldmeijer, A. J. 2009c Studies of Ancient Egyptian Footwear, Technological Aspects, part XVI: Additional Pair of Leather Open Shoes. *Journal of the American Research Center in Egypt* 45: 233-245.
- Veldmeijer, A. J. 2010a *Tutankhamun's Footwear: Studies of Ancient Egyptian Footwear*. Norg, Druk Ware.
- Veldmeijer, A. J. 2010b Studies of Ancient Egyptian Footwear, Technological Aspects, part XI: Sewn-edge Plaited Sandals. *Jaarberichten Ex Oriente Lux* 42: 79-124.
- Veldmeijer, A. J. 2019 *The Ancient Egyptian Footwear Project: Final Archaeological Analysis*. Leiden, Sidestone Press.
- Watanabe, Y. and K. Seki 1986 *The Architecture of 'Kom El Samak' at Malkata-South: A Study of Architectural Restoration* (Studies in Egyptian Culture 5). Tokyo, Waseda University.
- Wilkinson, R. H. 1992 *Reading Egyptian Art: A Hieroglyphic Guide to Ancient Egyptian Painting and Sculpture*. London, Thames and Hudson.
- Wilkinson, R. H. 1994 *Symbol and Magic in Egyptian Art*. London, Thames and Hudson.
- Wilkinson, T. 2005 *The Thames and Hudson Dictionary of Ancient Egypt*. London, Thames and Hudson.
- Willems, H. 1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*. Leiden, Ex Oriente Lux.
- Winlock, H. E. 1948 *The Treasure of Three Egyptian Princesses*. New York, The Metropolitan Museum of Art.

- Zohary, D., M. Hopf and E. Weiss 2012 *Domestication of Plants in the Old World* (4th ed.). Oxford, Oxford University Press.
- 川西宏幸 1999『古墳時代の比較考古学—日本考古学の未来像を求めて—』同成社。
- 川西宏幸 2015『脱進化の考古学』同成社。
- 周藤芳幸 2014『ナイル世界のヘレニズム—エジプトとギリシアの遭遇—』名古屋大学出版会。
- 日本皮革産業連合会 2009『足サイズ計測事業報告書』日本皮革産業連合会。
- 日本皮革産業連合会 2013『足サイズ計測事業（4歳～18歳）報告書』日本皮革産業連合会。
- 花坂 哲 2004「古代エジプトの皮革技術—アコリス遺跡検出の「皮革工房址」をめぐる—」『筑波大学先史学・考古学研究』15号 53-77頁。
- 花坂 哲 2005「皮革サンダル考—エジプト・アコリス遺跡出土のサンダルを例として—」『西アジア考古学』6号 87-101頁。
- 花坂 哲 2009「アコリス遺跡における「豊饒の民間信仰」—土製ヒト形小像から探る—」『筑波大学先史学・考古学研究』20号 51-74頁。
- 花坂 哲 2011「コブラ形土製品の製作技法とその機能—アコリス遺跡出土資料を中心として—」『西アジア考古学』12号 57-78頁。
- 花坂 哲 2019『古代エジプト王朝時代の皮革技術の研究—アコリス遺跡出土資料を基にした総合的考察—』博士論文 筑波大学。
- 花坂 哲 2020「古代エジプト王朝時代の庶民の埋葬形態—第3中間期のアコリス遺跡南区の場合—」常木晃先生退職記念論文集編集委員会編『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地—』169-183頁 六一書房。
- ヘロドトス（著）松平千秋（訳）1971『歴史（上）』（岩波文庫 33-405-1）岩波書店。
- 屋形禎亮・杉 勇（訳）1978『エジプト』杉 勇・三笠宮寛仁（編）『古代オリエント集』（筑摩文学大系1）401-656頁 筑摩書房。
- 山崎世理愛 2014「オブジェクト・フリーズ（frise d'objets）と出土遺物の比較」『エジプト学研究』20号 115-129頁。
- 米山由夏 2019「古代エジプト、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の単純埋葬に関する一考察—ジェセル王階段ピラミッド西側を例として—」『西アジア考古学』20号 69-84頁。
- 和田浩一郎 2008「古代エジプト・新王国時代の土坑墓埋葬における頭位方向について」『オリエント』51巻1号 87-109頁。
- 和田浩一郎 2014『古代エジプトの埋葬習慣』ポプラ新書。
- 和田浩一郎 2018「古代エジプトの集落内埋葬—子供の事例を中心に—」『オリエント』60巻2号 141-156頁。